

金沢 21 世紀美術館で考えた

新年度に入ってすぐの土曜日、金沢でセミナーを開催した。初めての金沢だからと、前日から入り、夕食には加賀料理を堪能した。ただ問題はそこからで、月初の金曜日であったため、数時間後には米国では雇用統計や ISM 製造業指数の発表が控えていた。おまけにその日の日本株は、日銀短観が案の定、惨憺たる結果に終わり、この日の日経平均は 594 円も下落していた。資料は全面的に作り直さなければならない。

こうなることはわかっていたので、一休みした後、夜遅くから資料を作り始めた。人によっては何ヶ月（あるいは何年）も同じ資料でセミナーを続ける人がいるが、それは私には出来ない。常に最前線で市場を見ていることを自負している以上、一番新しい分析と解釈を伝えるのが自分の責務だと思っている。ただ、そこで自分の脳の中で、何が閃くのかはその時になってみないとわからない。その閃いたものを形にする作業なのであるが、場合によっては何も閃かず、ただただ絞り出すような苦しみが待っていることもある。幸いなことに、この日はわりとすんなりイメージは固まった。

ところが、資料を作り始めるとすぐ、何か違和感を覚えた。これまでの思考パターンでは説明がつかない現象が起きている。例えば雇用統計も ISM も良好な経済状況を反映する内容であったのに、さほど米国株は上がらない。むしろドルなどは下落している。ドルの下落は昨年予想した通りであるが、米国株が上がりにくくなってきていることには、何か新しい、まだタイトルの付けられていない、変化の“兆し”を感じた。

日銀短観についてはまだまだ深掘りが必要である。これを字面だけ追って表面的に解釈しては戦略を誤る。政府も日銀も経営者も、計画が狂ったのである。計画の修正にはそれなりに時間がかかる。今わかるのはそれだけだ。

セミナーの資料が完成したのはもう明け方だった。倒れ込むように寝た。でも翌朝はしっかり起きて朝ごはんを軽く食べて、チェックアウトを済ませ、街へ出た。どうしても行きたいところがあったからだ。

初めて見る 21 世紀美術館は、美術館と言うよりも公園に近かった。朝 10 時頃だったと思うが、もう人が溢れていた。係りの人に写真を撮ってもいいかと聞くと、ものによるので、ひとつひとつ確認してくれと言われた。写真が撮れた方がいい。勿論、絵画や彫刻などで、コピーされては元も子もないものは、撮って真似されては台無しになってしまうが、そもそもコピー不可能な、あるいはむしろコピーされてその情報が拡散したほうが、芸術的価値が高まるもの（無名から有名への変化）は、どんどんコピーすべきだと私は思う。例えば、NY 近代美術館（MoMA）などは写真が撮り放題である。芸術家の卵たちは、ここで写真をいつも撮りまくっている。

現代的な作品が展示されており、どのコーナーにも足が止まった。展示数が意外と絞られていて、広い空間の中に、ぽつんぽつんと展示されているのが何よりも良い。鑑賞する

時に必要な、“余白”がそこに与えられるからだ。

そんな作品群の中で私が圧倒されたのがこれだ。ぐうの音も出なかった。しばし沈黙し、興奮に胸が高鳴った。言葉にならない感動とはこのことだった。

その作品は、最初見た時はこんな感じだった。

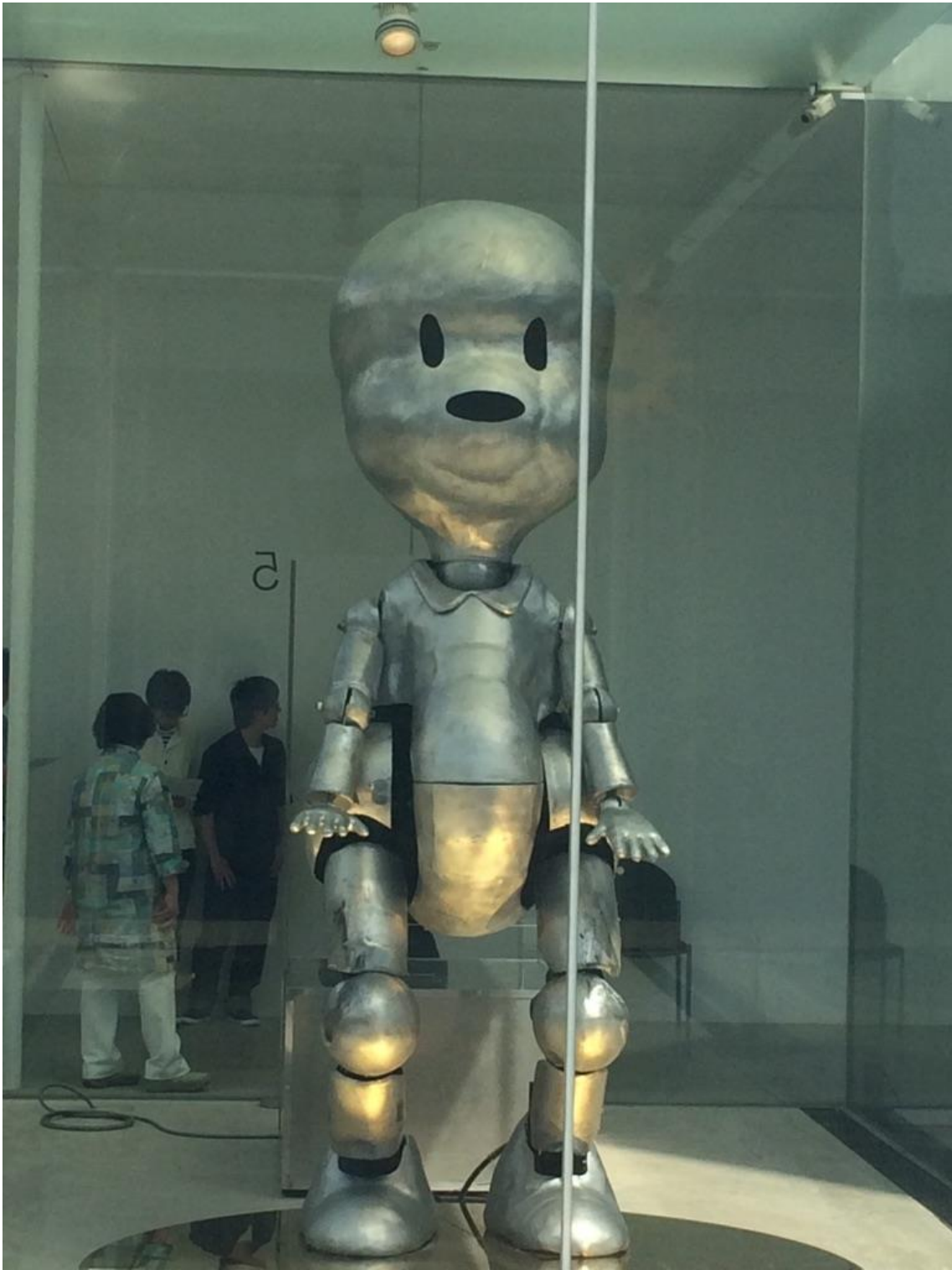


なんだこれは、と、この時点でもう心をわしづかみにされた。人間の悲劇をシンボライズしているのか、とも思った、しかし瞬間、この作品は動き出した。



ロボットである。そして立ち上がったのだ。その表情は赤子のようにであり。見事な三頭身である。ミッキーマウス、ドラえもん、その他いくつものアイコンが頭をよぎった。しかしそのどれとも違う、それでいてそれらすべてに共通する、何かを発散している。

ついに赤子ロボットは二本足で立ちあがった。



作品名は“ビバ・リバ・プロジェクトスター”という。1965年生まれのヤノベケンジと言う人が作られた。放射能を20回浴びると立ち上がる幼児をモデルとし、作者はこの作品に「絶望からの再生」の意味を重ねている、と書かれていた。チェルノブイリ被災地に作者はアトムスーツを着て、荒れ果てた幼稚園にあった人形を拾い上げ、これを甦ら

せようと決意する。そうして出来上がった作品がこれだった。

久しぶりに頭がくらくらした。勿論、この作品から何か新しい発想が生まれたわけではない。新しい戦略が思いついたわけでもない。ただその日の金沢セミナーは、いつもとは違う内容だった。参加者たちもスタッフたちも気が付かなかったかもしれないが、私はいつもとは違っていた。

まだまだ知らないことは多いし、まだまだ感動することはある。